

CLIL 内容言語統合型学習
上智大学外国語教育の新たなる挑戦
(ぎょうせい、2011年)

第1章 CLILの基本原理

1. CBIとCLILの比較

CBI = Content-based Instruction 「内容中心指導法」

- ・ 1970年代以降に登場したコミュニカティブな英語教育法の派生形
- ・ 元来はアメリカの学校で第二言語としての英語をネイティブが教えるためのもの

CLIL = Content and Language integrated Learning 「内容言語統合型学習」

- ・ 原理や技法のほとんどをCBIと共有している
- ・ 特徴づけるのは4つのC (Content「内容」、Communication「言語」、Cognition「思考」、Community「協学」)

CBI、CLILの特色

- ・ 学習内容 = 強化やテーマなどの内容のあるものを学習の中心に据える
 - * 英語そのものを学ぶのではなく、英語で何かを学ぶ
- ・ 学習言語 = 内容学習のためのツールとして英語を使う
 - * 英語は他教科や特定のテーマを学ぶ主題
 - 「特に「認知学習言語能力」(CALP=Cognitive Academic Language Proficiency)の伸長が意図されている」
- ・ 学習活動 = オーセンティックな教材を用いた4技能統合型のタスクを行う
 - * 4技能を有機的にリンクさせた情報処理学習
 - 用いる教材は「語学学習のために作られたのではない」様々な媒体のもの
- ・ 学習成果 = 知識力、言語力、思考力の3つが育成される
- ・ 学習理論 = 理解可能なインプットを与え、教師や仲間と意味のやり取りを行う
 - * 「理解可能なインプット」
 - クラッシュェンの「インプット仮説」
 - ヴィゴツキーの「社会文化理論」

「学習者にとって理解が可能な話し言葉や書き言葉に大量に触れることで脳内の言語習得プロセスが進み、また教師の手助けを借りたり仲間と共同で英語によるインタラクティブなコミュニケーション活動を行うことで言語能力がたかめられていく」
→インプットからアウトプットへ

CBI と CLIL の違い

- ・背景の違い

CBI

→1970年代以降に登場したコミュニケーションな英語教育法の派生形

→元来はアメリカの学校で第二言語としての英語をネイティブが教えるためのもの

CLIL

→1995年に欧州評議会が出した「母語+2ヶ国語」を原則とした「ヨーロッパ市民」育成のポリシー

→英語を外国語として用いる環境で、主に非ネイティブ教師が授業を担当するためのもの

- ・内容的な違い

「端的に言って、CBIよりもCLILの方が使いがってがよい。それはひとえに、すでに触れた「4つのC」を核とする、洗練された使いやすいフレームワークが用意されているからである」(著者の意見)

2・CLILの「4つのC」

CLILの4つのC=内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)

- ・内容(Content) = 新しく得られる知識、スキル、理解
- ・言語(Communication) = 4技能の訓練(語学学習)よりも、コミュニケーションツールとしての使用言語に比重が置かれる

→とはいえ、これらの言語は有機的に組み合わせることで語学学習は促進される

CLILにおける「3つの言語」

- ・学習の言語(language of learning)
= テーマやトピックの理解に直結する言語材料や技能
- ・学習のための言語(Language for learning)
= 英語で何かを学ぶ際に必要な表現や学習スキル
(ノートの取り方、資料の読みこなし、議論の方法 etc.)
- ・学習を通しての言語(language through learning)
= 「学しいの言語」と「学習のための言語」を結びつける仕組み

・思考 (Cognition)

→CLIL は「表面的な学習 (shallow/surface learning)」と「深い学習 (deep learning)」を学習活動にバランスよく取り込む

- ・表面的な学習 (shallow/surface learning) = 知識の理解、暗記
- ・深い学習 (deep learning) = 学んだ内容を既存の知識や経験に結びつける、批判的に考察したりする

→ブルームによる思考の分類

記憶→理解→応用→分析→評価→創造と難易度が増す

→LOTS (低次の思考力)、HOTS (高次の思考力) の活用

「授業の前半では新出内容の「理解」やその用語・概念を使ったディスカッション」(LOTS) を行い「後半ではグループで問題解決型のプロジェクトを行う」(HOTS)

・協学 (Community)

→CLIL がヨーロッパという多民族・多文化・多言語からなる共同体で生まれた教育法

(例) クラスメートの経験や意見を共有する、地球温暖化、熱帯雨林の伐採をトピックスとして扱う (= 地球市民)

3・CLIL のバリエーション

CLIL の「柔軟性」

・「目的」のバリエーション

(例) 言語学習? (Soft CLIL) 内容学習? (Hard CLIL)

・「頻度・回数」のバリエーション

(例) 数回程度の CLIL? (Light CLIL)、本格的な CLIL カリキュラムを組む (Heavy CLIL)

・「比率」のバリエーション

(例) 一部の CLIL 的タスク? (Partial CLIL)、授業全体で CLIL を行う (Total CLIL)

・「使用言語」のバリエーション

(例) 日英両語で進める? (Bilingual CLIL)、英語のみで行う (Monolingual CLIL)

* 原則、目標言語のみで教えるが、必要に応じて第一言語を使うことも許容されている

(例) 日本の中学校や高校の授業で CLIL を導入する例

→弱形 CLIL (Weak CLIL) = Soft、Light、Partial、Bilingual

(例) 大学や高校の選択授業

→強形 CLIL (Strong CLIL) = Hard、Heavy、Total、Monolingual

4・まとめ

CLIL による「高品質な授業を実現する」には、授業者に「さまざまな教育原理・技法を有機的に統合する」専門性と経験が求められる

→CLIL とは「プロが調理した料理」

第2章 CLIL のシラバスと教材

1・CLIL のシラバス

言語シラバスについて（ホワイトによる）

・3区分8種類

→3区分（内容、技能、方法）

内容

構造＝過去形、比較、仮定法 etc.

状況＝駅、郵便局、ショッピング etc.

話題＝休暇の過ごし方 etc.

機能＝許可、依頼 etc.

技能

言語＝4技能

学習＝情報の理解や議論、展開法

*以上がホワイトによるとタイプA

方法

過程＝生徒自身が学習内容や方法の決定に関与する

活動＝言語タスクと組み合わせを行う

CLIL のシラバスについて

→話題シラバスをメインに、言語シラバス、学習シラバス、活動シラバスを組み合わせる

2・CLIL の教材

CLIL 教材の作成法

→3段階

(1) 素材の収集（内容）

→語学学習のために作られたものではない、オーセンティックなものが望ましい

(2) 素材の分析とタスクの考案（言語・思考・協学）

・PPP というフレームワーク

文法や語彙などの新言語材料を提示（Presentation）

反復練習（Practice）

産出 (Production)

→CLIL もこれに似ている。違いは、第2段階で「内容」「言語」「思考」「協学」とを有機的に組み合わせる

→新 PPP (Presentation、Processing、Production)

＊第2段階を Processing と読んでいる点に注目！

→CLIL では「内容」「言語」「思考」「協学」の学びのサポートを用意する
（「足場」という概念）

新 PPP について

- ・ **内容の提示 (Presentation/Input)** →教科知識の生徒への提供
 - 提供される知識の「言語」の3つのポイントによる分析が必要
 - 言語面や内容面においてどんなサポートが必要かをチェックする
- ・ **内容の処理 (Processing)** →「思考」「協学」を組み合わせたタスクを与える
- ・ **内容の算出 (Production/Output)** →知識の活用を念頭においた表現活動
 - このステップでは「足場」の必要性ある
 - ・ 思考を喚起する質問をする
 - ・ 動機を刺激するフィードバックを与える
 - ・ 表現や構文を教える
 - ・ 見本を示す
 - ・ グループで協力して取り組ませる etc.

(3) ワークシートの作成

3・まとめ